
名もなき旅人

五十嵐 イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名もなき旅人

【Nコード】

N3247L

【作者名】

五十嵐 イツキ

【あらすじ】

己の名も、己の記憶も、世界すらも奪われてしまった。残るのは微かな記憶の残骸と何もわからぬこのからだのみ。ああ、なんと嘆かわしいことか！私は必ず己を取り返してみせよう。あの少女に獲り込まれてしまう前に――。欲望のままに書き綴った異世界ファンタジー。基本的にはシリアス設定です。

一話 微笑

意識がぼんやりと覚醒した。

青く粘着性のある液体の滴る自らの両の手を空に翳し眺めていた。少し頬が冷たいのは手に付いた雫が落ちたからだろう。ああ、どうやら長い間呆けていたようだ。上を向いたままだった首が軋むように痛んだ。

余計な刺激を与えぬようにとゆっくりと頭を降ろしていった。そして、目の前に広がる光景に思わず言葉を吞むことになる。

「・・・コレは・・・？」

尋常でないほど擦れた声を発した自分にまた驚くと同時に、たくさん疑問が頭の中に洪水のようになだれ込んできた。

此処はどこだ？こんな荒野私は見たことが無い。

コレは一体なんだ？人型をとる明らかな無機生命たち。

私が壊したのか？それらから流れる液体は自らの全身にも等しく掛かっている。

私はここで何をしていたのだ？そもそもどうやって此処にきたのかさえも覚えていない。

ああ、そして一番大きな疑問。

私は、だれだ？

混乱する思考がやつとそこまで追いついた時、ふいに頭を掠める親しい人達の笑顔。

闇夜に浮かぶ満月。極限まで痛めつけられ動かない自らの幼い体。

殆ど見えない霞んだ視界の中で映った幼いあのお方の姿……。

ああ、あのお方は誰だ？そのお方のためなら自らの命をも惜しみなく差し出せるほど大切なお人だったはずなのに。覚えていないことがこんなにももどかしいだなんて。昔は何度も何もかも忘れたいとすら思っていたのに……。

昔に思ったであろう感情だけが体に残り、それに伴う記憶を持つはずの頭は……霧のように朧気で儚い残骸しか残っていない。

「私は一体何者なんだ——っ！！」

殆ど声にならない悲痛な声で吼える。誰かがこの声に気付いてくれるようにと。

ガキユツ、と何かが弾ける音がした。自分以外の全てが無機物だった世界にはあまりにも場違いな音。思わず腰に下げた両刀の柄を握り振り向くと、そこには先ほどまではいなかった白いワンピースを着た可憐な少女が立っていた。

私の咆哮を聞いて駆けつけた……？

否、早すぎる。この荒野の前に一瞬で移動などできようはずも無い。少なくとも、なんらかの音が聞こえているはずだ。……では、こ

れは一体何者だ？

刀を抜き両手に構える。見たこともないはずのそれらはしつかりと体に馴染み、頭は覚えていないが体は攻撃態勢を取った。なんと気持ちの悪い、追いついていないのは頭だけではないか！

ざあ、と風が私自身の長い髪を悪戯にかき混ぜた。そうだ、混乱している場合ではない。ここで死んでしまえば何もかもが終わるのだから。

「・・・何者だ？」

答えによれば無事ではすまない、殺気と意図を乗せた静かな問に彼女は返さず何の感情も浮かべない無機質な表情で一步此方に踏み込んだ。体重を感じさせない軽やかな足取りにも関わらず、踏み出された右足の下敷きになった無機生命はグシャリと簡単に潰れた。

二、三步進むと彼女は立ち止まり自らの細い脚の下で潰れる無機生命に目を向ける。不思議そうに首をかしげ、むき出しの白い足の裏で見るも無残に変形していくそれを拾い上げた。

「——えあ？、こ、れ・・・あ？」

片手で潰れた人を模した頭を掴み、もう片方で愛らしく口元を押さえて言葉を発する異様な光景に尚警戒を強める。本能が語る・・・こいつはヤバイ、と。

言葉を発する方法を理解していなかったかのように、彼女は動く唇に手を当てる。それから細い声を発しながら唇の動きを手で追い、少しずつ意味の伝わる言葉に代わっていく声に満足そうに何度か小さく頷いた。

「これ、は？なに？」

そんなの私が聞きたいほどだ。

自然、刀を握る手に力が入る。目の前に対峙する脅威となるソレに怯えなど見せてはいけないが、だからといって真つ向に何かを仕掛けるわけにはいかない。幸いにもソレは今の所私に危害を加える様子は無い。うまく切り抜けるのが得策か。

「私にも、わからない。お前は何だ？」

「わたしにも、わからない。おまえはなにものだ。・・・わたしは、
べるそな。そして、こあ。なまえはまだない」

私の言葉を口に出して漸く反芻できたのか、ゆっくりと片言の言葉で答える少女。

「おまえは」

そこで言葉を切りじつと此方を見詰める少女。意味が分からず答えられずにいると彼女は同じ言葉を繰り返す。どうやら疑問系で“お前は？”だったようだ。正しく言うと“お前は何者だ？”だろう。

「私は・・・わからない。お前と一緒にだ、今は名はない」

自然に笑みが零れた。自嘲の笑み。少女はまたもや不思議そうに首をかしげたが、表情がないためか薄っぺらい行為に思える。せめて眉を寄せるくらいはしてほしいものだが。

少女は唇の端を両手で引き上げようとす。が、右手に持った頭部が邪魔だったためソレを投げ捨てた。ガツツと重たい物が落ちる鈍い音が響き渡る。

「お前はあの人と同じくらいの年だな。・・・何故なんの表情も無

い？」

口からふと飛び出た言葉に微かに動揺する。口走った“あの人”とは、一体誰のことを指すのだろうか。

少女は小さく目を見張った。表情が少し出てきたな。桃色の唇から手を離し先よりも早い歩調で接近する。その目に僅かな殺気を込めて。

「わたしは、ペルソナ。コア。せかいに10体。わたしは10体目。おまえをもとにさつきせいけいされた」

“おまえをもとにさつきせいけい”・・・？
私を元に成形された？

「言葉もさつきおまえからうばった。頭はわかってても体がやり方を知らないから、少し失敗した。おまえの記憶を元にわたしという存在は完成した」

どういうことだ？

少女の目は先ほどまでの呆けた様子は微塵もなく、肉食獣のように寧猛に鋭く光り、瞳孔は爬虫類のように細長い。

破壊音がすぐそこまで近づき身の危険が迫っているというのに、少女の瞳に釘付けになっているなど・・・なんと間抜けな！

「だけど、全部の記憶を吸収できてない・・・もう一度するべき・・・？」

・・・記憶を吸収する？

残されたこの霞がかった朧の記憶でさえ奪うというのか。大切な大切なあの方達との記憶を、これ以上他人に暴かれて穢されてはたまるか！！

瞬間、恐怖や畏怖などという感情はどこかへすっ飛んでいった。あるのはただ理不尽に奪取してゆこうとする少女への怒りのみ。かように無垢で可憐に見える少女に刃を向けるなど本来あってはならないが、あのお方達との記憶を穢そうものなら、容赦なく破壊しなければならぬだろう。

怒りに呼応するように両の手に握られた刀がドクンと脈を打ったような気がした。

「それ以上近づけば、斬る」

彼女はピタリと歩みを止めた。しかし私の殺気に恐れをなしたわけではなかった。

ふわり　とぎこちなさの残る表情で、彼女は笑った。

「今はまだいい。お前はおもしろそうだ」

くると踵を返す少女。斬らなければ、壊さなければならぬのに体がそれを許容できない。自然口から悲鳴が上がる。それでもどうかして彼女を仕留めんと一歩踏み出したが、そこで膝を折って崩れ落ちてしまった。刀を取り落とした両の手で掻き抱くように頭を押さえる。

痛いなんて言葉で言い尽くせない。痛み慣れる事を許さないように強弱のある強烈なそれが胸を、頭を、全身を駆け巡る。生半可な痛みなど通用しない屈強な体が此处まで痛めつけられようとは。

「それは副作用。ペルソナから記憶を奪われた者は、期限内に取り戻さないと死ぬ」

破壊音が遠ざかっていく。彼女が離れていつているのか、私の意識が薄れていつているのか判別はつかないが、少女の細く美しい声だけはしっかりと頭に焼きついた。

「いつかまた会いましょう。その時はいっぱい遊んでね」

破壊音が完全に消え失せるのと同時に、私の意識は深い闇の中に沈んだ。

二話 主人

背中を引つかかれる小さな痛みで意識が覚醒した。微かに霞む視界に映るは陶磁器のように真っ白な腕で、どこかで見たなと記憶を探って掘り返そうとしてみる。その間も気だるくて指一本動かせない体ながら、背中を移動する痛みだけは嫌にはつきりとしている。

「キウ」

・・・キウ？

ゆっくり、それこそ虫が止まっても逃げないほどの速度で頭を動かし赤い瞳をそれに向けた。相変わらず視界はぼやけているが小汚い茶色の生物が背中に押し掛かっていることだけはわかった。

「ッ！キュウウー！！」

目・・・なのだろうか。不思議そうにこちらを覗いていた金色のそれと目が合い、驚いたらしい生物はぞわりと毛を逆立てて金切り声を上げた。が、私の背中から一步も動こうとしない。

月色の瞳・・・ああ、どこかで見た気がする。美しく気高く、いくら手を伸ばしても届かなかった――。

「ッ！ッ！キュキイイ！！」

がりがりとなを立って小さな攻撃を仕掛けてくるそれ。小汚くてぼ

さばさの雑巾のようにしか見えぬというのに、なにやら惹かれてしかたがない。ふ、と自然に笑みがこぼれる。なぜか少し痺れる体をゆっくりと動かして仰向けに転がりなおす。背中に乗っていたそれは当然落ちることになり、短い悲鳴らしい声をあげてコロコロと転げ落ちた。普通の野生動物ならここまでされれば逃げて当然だが、こいつは逃げないだろうなと思った。

「——おまえ・・・」

出した声は酷く掠れていた。そういえば喉も渴いているし、腹も減った。このぶんだと二、三日は飲まず喰わずで倒れていたようだ。生物は警戒はしているものも、やはり逃げなかった。転がり落ちたそこでぱつと姿勢を正して、綺麗な瞳で此方を覗き込んでいる。

「お前、独りか」

仰向けになることで漸く周りがよく見えるようになった。陶磁器のようだと思った腕は人を模した機械だったようで、青い液体とともに大量に散らばっている。だが全てが機能停止しているようで、動く生物は私とこれだけだ。

金色の瞳を見て、すこし思った。ぼさばさの汚い体ではあるが、瞳だけはらんと生気を燈して輝いている・・・しかしその瞳もどこか少し寂しげだった。ここに散らばる無機生命とは違う体温を持った私を見つけて、思わず此处に留まったのだろう。

「キユウ」

言葉がわかるのか、それとも声に反応しただけなのか。動物は不思議そうに一鳴きし、ふと此方に近づいてくる。子犬のような体躯を小刻みに揺らしてそれは私の顔に鼻先を寄せて、頬を暖かい舌で何

度も舐めた。労わるように優しく、瞳は少し影を落としていた。

「キィユ」

腕を伸ばして撫でてみると驚いたように体を跳ねさせるが、“仕方ない”とでも言うようにじっと触らせていた。その様子にふてぶてしいものも感じるが、金の瞳が影とともに温かい色を示しているのを見てどうでもよくなった。

ああ、私はこの色に弱いようだ。

しばらく続けているとだんだんと体の機能も戻ってきた。痺れていた体も少しほぐれ、力も入る。ぐっと体を力ませて立ち上がると顔を舐めていたそれは後ろに飛びのいて離れた。

「・・・動くな。特に異常も、ない」

頭が猛烈に痛いだけだ。

腰に挿していたはずの愛刀は足元に二本並んで落ちていた。それも拾って確認するが、二振りの刀は鋭く光りを反射させただけで何処も異常は認められなかった。心地よい鐸鳴りの音を聞きながら鞘に収めて改めて辺りを見渡すと、荒んだ野に私を中心として大量に転がる無機生命。遠くを見渡すが地平線が見えるばかりで集落は見たらず首を動かして探すかやはり何もなかった。

「ツキ！キィウ！」

がりがり私の革靴を引っかくそれに、目を向けるとそれは先よりも目を輝かせて見上げてくるではないか。・・・無言で数歩歩くとトテトテと足を踏み出して付いてきた。

「・・・私と、くるか？」

無論聞かずとも付いてきたのであろうが、それは嬉しそうに声を上げた。

仕方ないと笑みを零してしゃがむと、さっきまでの警戒はどうしたのだと言いたくなるほど無邪気に飛びついてきた。どうやら気に入ったらしく頬を盛んに舐めて高い泣き声を上げて甘えてくる。よほど独りが寂しかったのか。

「お前に・・・名をつけようか？」

「キイウ！」

即座に鳴き声を上げるそれ。実は本当に言葉がわかっているのではないのか？

少し私から離れてちょこんと座るそれに見合う名をつけようと暫し悩む。

と、そこで自分の名が思い出せないことに気が付いた。そして同時に危険な雰囲気を持つ少女と激しい痛みも記憶から掘り起こされた。先ほど収めたばかりの腰の刀の一本に手をやり一気抜き放ち同時に周りを警戒する。さきほども見た風景となんら変わりはないが、背中が勝手にぞわぞわと逆立つ。

——いつかまた会いましょう

さらりと流れる長い黒髪。ぎこちないが艶やかでほのかに邪悪を滲ます笑み。

——その時はいっぱい遊んでね？

刀身に指を這わせた。指先は冷たい刀に触れていても心まで冷しく
くれることは到底なかった。

ドクドクと脈打つ心臓が痛い。あれから記憶を取り返さねば、私は・
・死ぬのだ。少女は「ペルソナと同化する」と言っていた。それ
は、私という存在が消える同意義なのだ。

あのお方を護り切れぬまま、ここで果てると？

またあのお方に死んだような瞳をさせると！？

あの人がどこかで泣いているかも知れぬのに助けに迎えぬと・・・
！？

そのようなことは決して許されぬ！！

「キィィウ！！！！」

痛みが足首を襲った。“っっ！？”と声を漏らしそうになり反射的
にそれを蹴り上げようとするが、寸での所で正氣に戻ることができ
た。

また、月色の瞳に囚われた。

・・・そうだ、私は帰らなければならない。あのお方の下へ、あの人へ。

自らが思考でなぞった人がどんな人物かも塵のように微かにしか思い出せぬが、本能が悟る。

立ち止まっている場合ではない。何を犠牲に払ってでも、悪魔に身を売っても、あのお方を護ると誓ったのだ。この誓いだけは・・・消して忘れない。奪われてたまるか！

「すまない――」

金の瞳を目一杯に見開いて、黒い物に囚われかけていた私を懸命に引き止めるそれにそつと手を伸ばした。先ほどの弾みで少し切ったらしい指先に血が筋を作るが、それでもソレに触れたかった。

「ありがとう」

満足げにそれは目を細めて私の手を真つ赤な血ごと舐めた。

「シウメント――誓い、という意味だ」

私の【誓い】として付いてきてくれまいか？

月色の瞳が刹那輝いた気がした。

「キィウー!!!」

ソレ・・・否、シウメントは歡喜に鳴いた。

生まれてすぐ親に捨て置かれ、体が小さいために何度も死に掛けた。それでも生き残れたのは己の特異な種のお陰。独りでこの荒野を練り歩き、栄養分を探し、生き抜いてきた。しかし、もう孤独ではない。

己が捜し求めた・・・主人が出来たのだ！

シウメントは身じろいだ。先ほど頂いた主人の血が体で蠢いているのがよくわかる。力が、増してゆくのだ。魔力は十分にある。この小さな体では主人のために動きにくい。主人と同じ人に、人型になるう。その赤く美しい人の隣に立てる人になるう。

次の瞬間シウメントは魔力を開放した。

「主人！シウメントはこの身をあなたのために、そしてあなたの【誓い】のために生きましょう！」

茶色の長い髪に月色の瞳、端正に整った顔に少年らしい体軀。シウメントは人型をとって先ほどと同じく自らの主に飛びついた。

三話 異界

・・・小汚い小動物が、少年になった。

突如表れた少年に嬉々として押し倒され頬擦りされている状況に、あまりにも陳腐な言葉が思い浮かんでしまうほど、私は相当混乱しているらしい。だが驚き混乱するのも当たり前だと思う。シウメントと名づけた生物の瞳が発光したかと思った次の瞬間、淡い光は全身を包みこみ、小動物は十歳くらいの少年に変化したのだ。

「主人っシウメントは何処までも着いていきます」

やっと顔を上げたかと思えばシウメントはきらきらと瞳を輝かせて高らかに宣言した。確かに私の【誓い】になってくれとは言ったが、よもやこのような少年に誓いを立てさせてしまうなどとは・・・。
しかし動くとは言えどもまだまだ本調子でない身体にのしかかられているのはあまりいい気分ではない。——それが全裸ならなおさら。

とりあえずどかそうとしてみるものも、いやいやと身をよじって擦り寄ってくる少年は存外に力が強く無理に離せばこちらが痛い目を見ることになるのだろう。

「・・・とりあえず、現状を説明してくれないか？」

もう好きにさせておこう、と思ったのは状況を把握しておきたかったらだ。・・・決してめまぐるしく変わる状況に疲れたからではない。

「はい！シウメントは魔狼種最大階級【オルファス】であります。主人の血を媒介に魔力を頂き名を授かりましたことにより、魔種と人間の契約を行いました。血と名の盟約によりこれよりこの魔狼種はシウメントとなり貴方様に仕えさせていただく所存にあります」

「オルファス？聞いた事が無いな。それに契約とはなんだ」

「主人は異界の民ですね。歪に飲み込まれてこちらの世界へやってきたのだと思われます。この世界の人間は異世界というものを認識しておりませんが、シウメントのような高位の魔種の中では何体かそのような異界の民と契約を結んでいるようなものもあります。契約を結ぶ事により主従関係を結び、魔種の魔力を行使する事ができたり、このように主人の血を頂くことにより人型をとる事もできます。また 基本魔力の少ない人には上位魔種と契約することにより魔力だけでなく身体能力までもが飛躍的にあがるといわれております」

至極真面目に質問に答えるシウメント。しかもさっきまで小動物だったとは思えないほどの確でわかりやすい。これではおつと頬を染めて擦り寄ってこないのであれば完璧なのだが。

シウメントの言った言葉を整理してゆくと、とてつもなくいやな予感のする言葉が混ざっていたのに気がついた。

「異界と言ったな？ここにはレンティシア王国という国は存在しないのか！？」

・・・自分で言った国名にまったく思考が付いていかない。どこだそこは？

口から飛び出た言葉に勝手に戸惑う私に少し気をつかった少年はや

つと頬擦りをやめて少し離れてくれた。しゅんと見えない尻尾が垂れるのが見えた気がしたのは先ほどまで小動物であったのを納得してしまったからだろう。

「はい・・・残念ながらそのような名の国はシウメントが生きたここ159年存在しておりません。主人の故郷でございますか？」

「・・・わからない。異界へ帰る方法は？」

「もう一度歪に入ればあるいは・・・。しかし、歪はいつどこで発生するか予測不能で、それにもし発見できたのだとしてもまた同じところへ戻れるかどうか・・・」

故郷も、現状も、自らの名すらわからぬこの私がどうやってあの方の下へ帰り着けばいいのだ。・・・いや、それよりもまず記憶をあの少女から取り返せばいいのではないか。思い出しただけでも怖気が走る少女の笑みを瞳を閉じて振り払った。

「シウメント」

「っはい！！なんなりとご命令くださいませ！」

「・・・なぜそのように張り切る？」

「主人の為ならこの命ささげても惜しくはありませんゆえ！」

実際は初めて主人に名を呼びかけて貰えたのが嬉しくて仕方がないのが大半を占めていたが、シウメントは本気でそう思っていた。その決意を示した瞳に己を重ねた彼は言おうと思っていた言葉を飲み込んだ。

私に使いなどいらぬ。一人で帰り着いてみせる、と。

魔物と言っていたが所詮は動物、それも今まで独りだった子供だ。温もりにつられて付いてきて野生の生活をなくさせて、やはり契約

は間違いだったと後悔させたくは無い。そんな痛い思いをさせるくらいなら初めから突き放しておいたほうがいいのだと。しかしシウメントは本気だった。ここで何を言っても決して契約は放棄しないだろう。

「シウメント、なぜ私についてくると決めたんだ？」

この問いだけでわかるだろうか？私の意図、その背景。

先ほどのやり取りからもわかっていたが、やはりシウメントは聡明らしい。魔物にしてはまだまだ短いが、159年生きたというこいつは長い年月に見合う知性も兼ね備えているのだろう。にっこりと天使のように微笑んで、シウメントは言葉をつづった。

「シウメントは主人のその人間らしい優しさについてゆこうと決めました。言葉の通じぬシウメントにも優しくお声をかけ、しかもシウメントの気持ちにも気がついていただいたではありませんか。優しく強く、そして美しい貴方様にこの命をささげたいと思ったのです」

ああ、この魔物に惹かれた理由が少しわかった。

かすかに残る残骸の記憶のなかで私もあのお方についてゆこうと決めたのだ。シウメントと同じ理由で！

顔も名前も何もかもしない出せぬあのお方だが、その決意だけは覚えていた。覚えておりましたぞ……。

「——ともにゆこうか、シウ。私は主としてお前を守ってゆこう」

お前を救う事で私も救われるのだろうか。少しでも決意を汲むことができるだろうか。

「っ！はい！共に生きましょう、わが主！！シウメントが必ず貴方様をお守りいたしましょう！」

シウメントは花の結ぶようにほころんだ。

とりあえず集落のあるところへ移動しようかと提案してみたところ、シウは北西の方向に大きな町があるという。そこへ向かう途中にもレイガ村という小さいが医療魔術の発達したところがあるらしい。

「シウメントも何度か村人が倒れた魔物を治療しているのを見かけた事がございます」

「なぜ魔物を？」

シウによると害のある魔物は倦厭されていると聞いた私にはその言葉がおかしく感じられた。いくら害のない死に掛けの魔物でも、治療してもあまり利益などないだろう。それもシウのように高位の魔物ではなく下位の魔物だというのだから殊更おかしい。

そういうとシウは顔を少し曇らせた。

「理由は存じあげません。情けをかけて治療しているわけではなさ

そうでした。不穏な気を感じたので遭遇するたびに逃げておりまして、その魔物がその後どうなったかも・・・」

申し訳ありません、と頭を下げるシウに気にするなと声をかけながら、頭はこの後どうするべきかと考えていた。

大きな町という位だから情報も当然集まるのだろう。すぐに辞められるような仕事を見つけて働きながら異界渡りの情報を探ろう。しかしそこに行き着くまでに食料と旅費が無ければ意味が無い・・・それにシウメントの服も買わなければ。ちらりと横目で少年を見るとシウは“何か？”とでも言うように首を傾げた。今の今まで獣の姿だったのだ。普通は服など着ないし今の格好に違和感も無いのだろう。

「シウ、まずはそのレイガ村に立ち寄る。日雇いの仕事を探し旅費が溜まればすぐにでも町に移動する。お前は獣型に戻っていてくれ」
「わかりました、わが主。シウメントは獣型を取りましょう。ああ、それと一つお願いしたい事がございますのですが」

了承を得るようにそこで言葉をきるシウメントに先を促すように小さく頷いた。ぱあっと瞳が輝く姿をみて、何がそんなに嬉しいのだろうかと少し思った。

「シウメントはシウメントでございますが、契約した主以外にその名を呼ばれるとその者が主人より魔力が強いと支配力が伝染してしまう場合がございます。主人の魔力より強い魔力などそうございませんが、いないとも限りませんゆえ。これより先は真名を口になされませぬよう伏せて下れば幸いです」

「そうか。ではお前も自分のことはシウと呼べ」

「はい、主人」

名のことでやりとりしていると、やはり自分の名が無い事が気にかかる。シウに名づけてもらおうかと思ったがとんでもないと顔面蒼白にして断られてしまった。名づけの儀式というものは魔種にとつては神聖なものであり主従関係を結ぶ以外に使用されることはほとんどないので、主にそんな無礼をできるはずもございません・・・とのことだ。

やはり自分で考えるほか無いのだろう。

だがいざ考えてみるとどれも自分には似合わぬ気がする。名など個人を識別する記号のようなもの、と割り切ってしまう方がいいのだろうかどうにもできない。

そうしているうちに集落が見えてきた。まだ数時間も歩いていないと言うのに、と少し驚くがそういえば身体能力も上がるというていたと納得した。

「・・・集落が見えてきたな。では頼むぞシウ」

こくりとひとつ頷いてシウは先ほどと同じ小汚い獣に戻った。高い泣き声を上げてこちらを見上げる様子は姿かたちは違っても何一つ変わっていないと思えて少し笑えた。

「そこのお前！止まれっ」

数分歩いて着いた門とも言つのもおこがましいほど小さな門の前で、突然刃が目の前で交差された。刃こぼれしていてとても切れるような代物ではない剣だが突き立てられるとやはりいい気分ではない。

このように小さな村に入るのになぜとめられたのだと少し思ったが、異世界なのだから勝手が違うのだらうと納得した。

「キィウウウ！！」

足元でシウが威嚇するように鳴き声を上げているが二人の門番は気にする様子も無くこちらに不審の目を向けてくる。右側の男性に視線をよこすとやけにくぐもった低い声で“何のようだ？”と問いかけて、ぐつと剣を握る腕に力を込めた。

「・・・町へ行きたいのだが生憎食料が足りなくてな。少し滞在させていたきたいのだが」

「そのように怪しげななりをしておきながら町へ行くだと？もう少しマシな言い訳は無かったのか！」

言うなり交差していた剣を私に向かって振り下ろしてきた。切れ味はないに等しいだろうが当たれば骨の一本ぐらいは折られるだろう・・・無論、当たればの話だが。

見栄えのために作られたのだろうやたらとゴツイ剣だ。刀身に沿うように手を這わせて少し軌道を変えてやるだけで簡単に地面に突き刺さってしまった。ふむ、やはりというべきか見掛け倒しの重いだけの剣のようだ。

「いきなり斬りかかるなど・・・危ないではないか」

「——貴様あッ」

よほど自分の腕に自身があつたのだらう門番の男性は顔を真っ赤にして再び剣を振り下ろす。

「っキィ！！」

足元にいたシウの近くに剣は刺さった。ぞわりと毛を逆立てるシウは小さな体軀を盛んに動かして私の背中をよじ登ってしがみついた。なんと器用なやつだ。

外れたとわかった男は懲りもせずにもた振りかぶった。確かに本人に力はあるようだ。がそれだけだ。軌道もぶれているし、なにより剣に身体が振り回されているではないか。激昂した青年に釣られてもう一人の青年も剣を振りかぶる。が、こっちは話にもならない。

ひよい、と身体を横にずらただけで二人の剣は地面でかち合った。

「ふむ、どうあつても中には入れてもらえぬか？」

「魔種をつれているうえに怪しいなりの男を迎えるというのか！ 我らの秘密を暴いて王都に密告するつもりなのだろう！」

語るに落ちるとはまさにこのこと。私はなにも知らないし食料や路銀さえ手に入れたらさっさと去るつもりで、貴様らの悪事など興味が無いというのに。

どうしたものか。ここで事を荒げてもいいことはひとつもない。

「あらあらお困りのようですね」

女性としては少し低く、男性としては少し高い妙な声が耳元で聞こえた。風に運ばれてきたかのような奇妙な感覚の声に目の前の門番二人を無視してぱつと後を振り返った。背中のシウも小さく威嚇の声を上げた。

「こんにちは来訪者様」

数メートル後方にいたのは、白磁の肌に深緑の髪をした男性だった。身体のラインの隠れるマントを巻きつけてはいたものも、その顔つきは中性的ながらもれっきとした男性だった。

「お前——」

「しっ！自己紹介は後にさせてください。まずはここを通りましよう」

耳元で聞こえるこの声はどうやら門番ふたりには聞こえていないようだ。彼らは突然振り向いた私と現れた男にどうしたらいいのかわからず、ただただ慌てふためいて剣を構えるのみ。

彼はそんな彼らに小さく微笑みさえ見せて優雅にも感じる足取りで近づき、その手に光る小さな水晶を見せた。とたんに顔色を変えて剣を下げて逃げるように元の位置に戻ってしまう二人をいぶかしげに見つめると、彼はこちらを振り向いてにっこりと笑った。

「さあ中へ。異界の来訪者様、ボクは貴方を探しておりました」

私の腕を取ってかしく男を見下ろしながら、今日は変なやつにばかり寄られるなと頭の片隅で呟いた。

四話 同士

「まずは此方へ。ボクがお世話になっている宿へご案内します」

小さな鈴をチリンと鳴らして先導する男。音源を辿ってみればそれは男のショートブーツに付けられたものだった。

「待て。名は何と言う？」

妙に事を荒げる前に助けてくれたのは有り難いが、なにぶん怪しすぎる。異界の存在は一般人には知られていないとシウも言っていたし、助けた理由も何もかもが謎。下手に信用するのも危ないだろう。不躰にも問いかけた私に対して怒ることもせず男は先ほどと同じく柔らかい笑みを浮かべた。“名乗りくらいは・・・いいよな”と小さく漏らしたのが聞こえた。ああ、怪しすぎる。

「申し遅れました。ボクはカグラと名乗っております。どうぞ呼び捨ててください」

「偽名か」

「ええ。・・・詳しいことは後ほどお伝えいたします」

それ以上は質疑を受け付けないうと態度で明確に示してカグラは足早に先を急いだ。怪しい事だらけだが、先ほどから村人の視線が痛い私にとってはカグラのほうの不審者だが・・・此処の者にとってはそうではないようだ。あまり警戒しすぎると当初の目的さえ達成できないだろうことは目に見えている。

背中から降りたシウが小さく鳴き声を上げて心配そうに此方を見上げるのが見えて、“心配ない”と伝えるように仄かに笑った。

「——すべては、世界の御心のままに」

その様子をちらりと一瞥したカグラは、誰も聞こえぬほど微かな声で呟いた。

なんの感情もうつさぬ瞳はもしも見ていた人物がいるのなら感じただろう、まるで死人のようだと。

「さあこちらへどうぞ。狭い所ですが」

宿というにはあまりに簡素な建物に案内された。出入り口だけは嫌味なほど大きく、垂れ下がった布を片手で上げて中へ促すカグラに従った。

「まずはお召し物を。この世界にその見事な服装は目立ちますゆえ」
「・・・そうか。すまない」

いえ、と小さく零して微笑むカグラは迅速に行動しざつと布を広げた。様々な色の中から好きなものを選びと指示されたので、とりあえず黒を選んだ。黒は、返り血が目立たないし喪服にもなる。さてその大きな一枚布で何をするのだと興味深く見ていると、視線の意味に気が付いたらしいカグラが説明をくれた。

「今からお召し物をお作り致します。ボクの服はお体に合わぬようですので」

「そこまでしてもらわなくても結構なのだが。・・・お前が作るのか？」

「ええ。大丈夫です。すぐに終わりますから」

それから数分後。服作りはカグラの言うとおりにすぐに終わった。両手で布を抱えてじつと俺を見詰めること三十秒。ぱつと視線を大きな布に移して突然ぱつさりとそれを豪快に切り分けてしまった。咄然とする俺たちなど全く気にも留めずに下書きなど当然ないそれをざくざくと切り進めて、時折他の色の布を当てて縫いこむ。朱を主とした止め具をぱつぱつと目にも留まらぬ速さで付け、最後に綺麗な金色の糸で襟元と思われる場所と裾に見事な刺繍を入れてカグラはふうつと息を吐いた。完成を意味するその吐息に手元のそれを覗き込むと・・・つい先ほどまでのただの布であったそれは綺麗に仕立てられた服に代わっていた。

「・・・凄いな」

「ありがとうございます」

素直に感想をもらすと作り物ではないと思われる笑顔で答えられた。そつと差し出された服を広げてみると、カグラの着ている服と少し似たデザインの上着だった。軍服のようなイメージだが、ソレにしては装飾が少なく袖が少し広い。軽くあわせてみると太腿の中ほどまでに裾がなく、前をとめても少し余裕があるだろう。体に合った服のほうが好きなのだが・・・これはこれで動きやすいだろうか。

「上着を脱いで袖を通していただけますでしょうか」

了、と目線で返して上着を脱いだ。私の着ていた服も軍服のようだが戦闘の所為か所々破れてしまっていておまけに青い液体までしみこんでしまっていた。もうあまり袖を通したいとは思えないが・・・一応保管はしておこう。

丁寧に袖を通すとやはり少し余裕があるが、まあ気にするほどでもないだろう。腰布と思われる金の布で腰を締めると思ったよりも肩周りが楽になった。腰紐があるならばこの刀も脇にさせるだろう。最後の仕上げと言って小さな装飾と直しをしていたカグラは、できればえを見て満足そうに笑った。

「肌着はまたご用意いたします。ズボンとブーツはそのままでも結構です」

「ああ、すまない。ありがとう」

お礼を言うつと途端にまた冷たい笑みに戻るカグラに一つ苦笑。頬に流れた真つ赤な髪を掻き揚げてから髪紐をもらえぬかと聞くと軽く見繕ってくれた。

「キウキーツキイイ！」

足元から小さな鳴き声。下から覗く小さな瞳はらんと輝き何かを伝えようと懸命に声を上げる・・・もちろんその意味は全く分からない。

屈んでその頭を撫でてやるとまた嬉しそうに目を細める小さな従者に思わずクスリと笑みがこぼれた。

シウが喜んでどこか心地よいのは、この小さな瘦躯に幼い頃の己を重ねているからだろう。

「・・・オルファス」

ピタリと、シウの動きが止まった。俺の手と戯れるシウにカグラが冷や水のような声がかけられたのだ。“フウウツ”と小さく威嚇しながらも私の後ろにじりじりと後退していく姿は・・・なんというか子供っぽさが滲み出ていて主としては少し情けないような気分だ。はあ、とため息を零す彼に一瞥をやるとカグラは翡翠の瞳の奥に燦る影をすつと隠してしまった。

「・・・カグラと言ったか。私の従者をあまり虐めてくれるなよ」
「ああ、申し訳ありません。来訪者様、お召し物の代えが終わりましたようでしたので説明をさせていただきます」

私の諫めも大して気にした様子もなくさらりと口上だけ謝ると、カグラはさつさと本題に移った。釈然としない気持ちもあるが彼の“本題”とやらが気になる。

何もわからないのだ。異界とやらに渡り、己の名すらわからぬこの身で・・・何をするべきなのか。どうすれば己の主のそのお足元に再び参り、あの尊い御身をお守りする盾に戻るのだろうか。

「来訪者様・・・？」

「・・・ああ、すまない。話してくれ」

気配を敏感に悟ったらしい彼がいぶかしげに私を気にかけるが、生憎と彼に私の心中を明かすことはしない。この心は名も姿も知らぬお方に捧げるものなのだから。

「では僭越ながら——」

数歩の間をゆつたりとした動作で摘め、彼は私の足下に跪いた。

「我が知識はペルソナの頭脳に。我が記憶はペルソナの知識に。我が名はペルソナの命に。残るは空の肉体のみ。刻限までに取り戻さねば、残る我が身もペルソナの養となるだろう。ああ、御身も我が数奇な運命と同じく呪われていらっしやる」

チリンとブーツの鈴が鳴り彼の頭が垂れる。

過去に見た誰かとその姿が重なる……。

あの時私が見たのは……誰かの背中だったような気がする。

「今は亡き親友に名づけられたこの名は今覚えぬ記憶よりも重い」

ああ、思えばこの男は私に名を尋ねることはしなかった。

「名もなき旅人、異界からの来訪者よ。私とともに王都へゆきましよう。私がとうの昔に忘れた希望とともに探しましょうぞ」

痛みの残骸などもう既がないというのに、無意識に手が胸を掴む。この痛みを目の前に傳く彼も等しく味わったのだろうか。

——いや、そんなことは今どうでもいい！

「それは、私の記憶を取り戻す手段か？」

「ええ」

「それは、私が元の世界に戻る手段か？」

「もちろん」

「それは・・・私が主のもとへ戻るための手段か？」

「あなたがそう望むのであれば」

足元でシウが小さく鳴いた。

「・・・ゆこうか、王都へ。私の望みのために。お前に案内を頼みたい」

「喜んで」

翡翠が心底楽しそうに歪んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3247/>

名もなき旅人

2010年10月10日03時54分発行